

団戀

斑猫賢二



テレビのチャンネルがかわると、画面はニュース番組を映し出した。画面の中では女性のキャスターが表情を変えずに事件を報道していた。

「昨日未明、K山の山中で、男性のものと見られる死体の一部が発見されました。警察ではバラバラ殺人とみて……」

背景にはヘリコプターから撮ったらしい山の上空からの静止画のうえに、「K山でバラバラ殺人」と血文字ふう々にレタリングされた赤いテロップが重ねてあった。

「現場に画面を移します」画面はすぐに現場からの中継にかわった。

「なんだ、また人殺しか」

お父さんはテレビの画面をみたまま、つまらなそうにつぶやいた。

いつもどおりの食卓だった。長方形の机の長いほうの一边に、おじいちゃんとおばあちゃんが座り、その向かいにはお父さんとお母さん。短い方の一边には弟の良平と、わたし。

その全員が残りの一边の向こう側にあるテレビに少し体を向けて、特に面白くないテレビ番組をみるようになっていた。

「うん、物騒な時代になったねえ」

おばあちゃんが箸で鯛の腹を裂きながら言った。それを見て食卓の周りをうろろしていた飼猫のミイが、みゃあ、と鳴いた。

「はいはいちよつと待ちなさい」

そういつておばあちゃんは鯛を一切れ左の手のひらにのせてミイに差しだした。ミイはすぐにそれをたいらげ、部屋の隅でまるくなつた。

「あー、おばあちゃんずるい。わたしもミイに鯛あげたかつたのに」

「僕も」

私と良平が不満げに机を叩くと、

「ああそれは悪かつたなあ。じゃあ明日は二人がミイにあげたらいいわ」

おばあちゃんは笑つてそう言つたが、お母さんが横から割り込んだ。

「いけません。ミイにはちゃんと餌あげてるでしょ。二人とも大きくならないといけないのよ。ご飯はちゃんと全部食べなさい」

おじいちゃんも、そうだ、というふうに笑つてうなづいた。

「それでは、次のニュースです……」

テレビのキャスターはいつのまにか男性にかわつていた。作り笑いを浮かべて、続きを読みあげる。

「N大学の研究所で、類推思考の出来るロボットが開発されました」

画面は簡単なコンピュータ・グラフィックスで描かれた、そのロボットの優れているところを説明する映像になつた。「ニューロン」と赤い文字で描かれた四角いわ

くから矢印がのびて点滅したりした。

「このように、このロボットは、簡単ではありませんが、『考える』ことが出来るようになったわけです」

すぐに画面はそのロボットの全体が映ったものにかわった。良平はそれを見て、箸で画面を指さして叫んだ。

「うわー、なに、これ。変なの」

確かに変な形だった。鏡餅に昆虫のような節足が無数にはえているという感じだった。クリーム色の体に、赤い眼のようなライトが二つ、並んで付いている。鏡餅の上の餅と下の餅との継ぎ目にあたる部分からは、一本のアンテナが触角のように伸びていた。

「これっ、箸で指さしたらいけません」

お母さんがするどく言い、良平はおとなしくなった。お父さんはお母さんに同意するようにうなづいた。

「でも、確かにそれだけ驚くくらい変な形やねえ、あれ」

おばあちゃんは良平をかばうつもりらしく、そう感心してみせた。おじいちゃんも一緒になって感心して、

「なあ。あんなロボットがそのうちにもっと賢くなるんじゃないだろうか」

私はあんなロボットが人間くらいの知能を持っていることを想像して、少し気分が悪くなった。

「自分らで自分の複製作ったり？」

「うん。そのうちあんなのがめっちゃくちゃに増えて、あんな足をわしやわしや動かして道路を這いずり回ったりして。それでそれがみんなおねえちゃんより頭いいの」

良平は調子に乗って続けた。

「それでそれが人間に反抗しはじめて、人間はあの体の裏にある毒針に刺されて殺されるとか」

「なんかの映画みたいだな」 お父さんは軽く言ったが、わたしは良平の話にいくらかの現実味を感じた。

「あんなもの、造らなかつたらいいのに」

ぼつりともらずと、お父さんは諭すように笑った。

「でも、ロボットってすごく人間の役に立つんだよ」

「そうだよ。ほら、たとえば……」

良平も続けようとしたが、わたしは遮って不機嫌に言った。

「それでもわたしは厭。ロボットなんかみんな潰れてしまえばいいのよ」

むきになったわたしを見て、皆はちよつと笑った。わたしも恥ずかしいような気

がして、うつむいた。

しばらく沈黙がつづいた。わたしも下を向いて黙々と食べつづけた。

「あ、明日はいい天気だねえ」

少しして、おばあちゃんが話題のきっかけを作ろうと、テレビの画面をみながら少し大きな声をだした。画面は天気予報にかわっていた。

「……は、降水確率零パーセント、雲の少ない、さわやかな一日になるでしょう……」

ぼん。

ふいに、弾けるような音がきこえた。

「なに、なに？ 何の音？」

しばらくして、こげくさいにおいが辺りを充満した。

「何のにおい？ 何かこげてるぞ」

「あ、あれ」

良平が指さした部屋の隅で、ミイがまるまったまま煙をあげてくすぶっていた。背中や顔の辺りの毛皮は火がついて、じりじりと縮むように黒く焼け焦げつつある。その毛皮の中からは白銀色の金属でできた骨格が覗いていた。肩のあたりの骨格に

は歯車がついていてシューーンと静かな音をたてている。ときどき全体を青い火花が散りバチバチと激しい音をたてた。

「うわあっ」

おじいちゃんが大声をあげてそのまま後ろに倒れた。良平も大声をあげてそのまま泣きだした。お母さんは目をまるくして、正座したまま腰を抜かしていた。

「ミイが……」

「いや、これはミイじゃない。偽物だ。誰かがロボットとすり替えたんだ」

お父さんはなんとか場をしずめようと叫んだ。

「みんな、早く逃げろ。爆発するかもしれん」

その声にも皆は腰を抜かしたまま、動こうとしなかった。ただ、良平だけは大声で泣きながら、テレビの横にある出口にむかって駆け出したが、すぐに転んだ。おじいちゃんにつまづいたのだ。

「ごん、と良平が頭を床にうちつける音がした。

跳ね返った頭はちぎれ、テレビの画面にむかって吹っ飛んだ。ガシャーンというおおきな音がして表面のガラスが割れ、画面は真っ暗になった。

良平の胴体のほうはわたしのいる位置からは見えないが、頭のほうのちぎれた首からは、いろいろな色のビニールを巻いたコードが、いくつも飛び出していた。う

ちつけた頭の皮はミカンの皮のようにはがれ、リベットで接合してある湾曲した白銀色の金属が見えた。

「良平ーっ」

お母さんは半狂乱になって叫んだ。

「良平も……ロボットだったのか……？」

青白くなった唇をふるわせて、お父さんはつぶやいた。おばあちゃんは気を失って倒れこんでいる。おじいちゃんもさつきから倒れたままだ。

部屋のどこかから、ジー、とぜんまい時計のまわるような音がきこえた。良平の音かも知れない。良平の体も頭もぴくりとも動かない。良平の表情は、まるで突然車にはねられた死体のように、驚きに目を見開いていた。

壁の時計が定時を知らせる鐘をうった。

それと同時におじいちゃんが爆発した。

小さな爆発だったので隣にいたおばあちゃんを誘爆させただけだったが、おじいちゃんのお腹は一本の背骨のような金属の棒を残しただけで、すっかり吹き飛んだ。顔も下顎と上唇がふっ飛び、おじいちゃんの顔はまぬけみだいになった。おばあちゃんも全体が爆発してもうもとの姿をとどめていない。

わたしは急におかしくなつて笑いだした。息ができないくらいに笑いつづけたがまだ笑い足りなかった。見ると、お父さんもお母さんもわたしと一緒になつて、気がふれたように笑い続けている。

お母さんが爆発した。

正座したまま頭だけ吹っ飛んだお母さんを見てまたおかしくなつた。なおも涙を流して笑いつづけた。お父さんもひっくり返つて笑いつづけている。

お父さんも爆発した。

もう笑っているのはわたしだけしかいなかった。ひとりだけの笑い声が部屋じゅうに響くのがおかしかった。壊れたテレビの画面を指さし、畳をバンバン叩いて笑つた。笑いすぎて死ぬかも知れないと思つた。

*

*

*

狂気の笑いをつづけている「わたし」のアップショットからカメラは徐々に引いていき、やがて部屋の全体像を映し出す。六つのロボットの残骸を前にして笑いつづける「わたし」。そして「ブチッ」という音とともに画面は暗転し、後に残るものは静寂と闇。

「なんだこの番組は」

テレビ画面がCMにかわり、画面を食い入るように見つめていたお父さんが、憑き物が落ちたように口を開いた。

「えーと、『団欒』だって。ドラマだよ」

弟が新聞を取り出して答える。

「気持ち悪いドラマだな。いったい何を考えてこんなのを放映してるんだ」

「私に聞いたって知りませんよ」

お母さんはお父さんにテレビのリモコンを渡し、投げやりに言う。

「見るのが厭ならテレビを消せばいいじゃないですか」

「ちよつと待ってくれ。わしが見たい番組がある」

そう言っつて、テレビを消そうとしたお父さんから、おじいちゃんがリモコンを奪い取った。

「いつも見ている番組をみないと気がすまないんですよ」

リモコンを操作するおじいちゃんの隣で、おばあちゃんが笑う。

テレビのチャンネルがかわると、画面はニュース番組を映し出した。

